

小説短編集・
イリヤの終わ

oboroduka

【死に眠る。エクリチュールは届かずに。】

私は暗い。私は沈鬱な闇の中を漂っている。未来に出口は無い。未来に出口は無いのだと。世界の内部にて、私は両手を伸ばす。生きられない現実が漂っている。ただ、空を見上げたいと思う。此の世界にせめてもの希望が欲しくて。

何故、此れ程までに、私は独りなのだろう。部屋の中で、ひきこもりながら。一人、自分自身を見つめている。今にも張り裂けそうな胸がただただ、苦しい。

私は疎外感ばかりが強かった。

学校にいても、何処か居場所が無かった。だから、中学校の頃は不登校気味だった。しまいには、親に怒られて、試練だと思って、無理して学校に通い続けた。

私は友達がいた事が無かった。

人の輪の中に入れない。私の言葉は彼らの言葉と分かち合えない。

言葉が掻き消えていくのだ。話しても、話しても、他の人とのコミュニケーションがうまくいかない。

そもそも、読書家は私一人だけだった。何だか、本を読む人間は、社会性が無い、とまで言っているかのような感じが、学校という空間にはあった。

私は私という存在を外側に出すにはどうすればいいのだろう。そのような事を漠然と考えていた。とにかく、周囲が辛かった。周囲は私を同じものへと同化しようと迫ってくるかのようにだった。私の思考が侵略されそうで。怖かった。

世界から、闇しか受け取ってないんだ、という現象を外側に出す行為として、ゴシック・ロリィタ服ばかり身に着けていた。大体において、ゴスロリ服というものは、流行廃りで消費されていく。私は、この格好を消費出来なかった。私が見えている世界。私の感じている世界を外へ出そうとする時、やはり、この格好しかなかった。私の声となって、ゴシック・ロリィタ・ファッションは存在していたのだった。私が暗い世界を見ている、という事。私は人間ではない何かに憧れている、という事。私は肉体を、異質な夜の魔物へと変貌させたい、という事を。私は、他者とはどうしようもなく。苦しくて仕方ないくらいに違うんだ、という表明。そして、何処までも服は、実体感を伴って、私の身を、鎧のように。剣のように。包んでくれた。私がこういうファッションを好んでいる、という事実が、何故か、中高生によるあるいじめの対象から外されたみたいだった。

バイトなどは、出来なかったので、親からの小遣いだったのだが、後ろめたさは不思議となかった。周囲の人間は、バイトを始めて、カラオケなどの話をよくしていたので、ますます話が合わなくなってきた。一応、仲良しグループみたいなものに入れて貰っていたのだが、言いたい事もろくに喋れずに、本当は友達ではないなあ、と感じた。

老いていく自分ばかりがいて。そればかりが辛かった。私は大人になれない。大人になれない、という事実ばかりが迫ってくる。何冊、何千冊、本を読んだとしても、私は大人じゃない。理解しあえる他者。鏡を見れば、顔が消えていこうとしていた。私は私の顔が崩壊していく気がして怖い。もう、二十歳をとっくに過ぎたのに。私は外の世界へと出られない。街を歩けば、暗い

、空ろな生ばかりが漂っている。

暗い世界の中で生きている。確かにそれだけが分かった。世界が真っ暗闇で、世界が暗いという事を同じように見てくれる人間が誰もいなかった。

光の燈らない、暗い洞窟の中を一人で歩いている。そんな実感ばかりがあった。

私は心の病気なのだろうか？ そんな事を漠然と思ひました。

インター・ネットで、自殺サイトを見ていた事もあったが。私は死にたいとは思わなかった。私は生きていたかった。だから、彼らと私は相容れなかったのだろう。私と彼らの違いは、私はずっと、本で自我形成してきたのだと知っていた。リスト・カットなどもしたいとは思わなかった。単純に、馬鹿らしく思えたし、そもそもメンタルヘルス系の人間は、仲間が沢山いて、楽しそうに見えた。

私の精神は成長出来ない。けれども、私の身体は嫌でも大人へと変わっていく。死の不安ばかりが募っていく。

人形になりたかった。天野可淡の球体関節人形みたいになりたかった。永遠に年を取らない少女。時間軸から閉ざされた少女。

私は時間に閉ざされたかった。閉ざされたまま、世界の外側を歩いて生きたかった。淋しさの風が吹き荒れる。林立する都市空間の中で、私は一人だ。けれども、本とファッションがあれば、私は生きてけるのだと思った。音楽はクラシックばかり聴いていればいい。ヴィジュアル系ミュージシャンや海外のゴシック・メタルだってある。私の言葉を代弁してくれる媒体は幾らでもある。夜を歌ったような音楽は、闇を歌ったような音楽は、心の傷を歌ったような音楽は、深く染み渡り、私の生を存在させてくれるかのようだった。

何故、未来に届かないのだろう。分かち合える人間が欲しかった。本の世界ばかりで生きている、その実感ばかりがあった。

好きな本も、孤独や淋しさ、悲しさ、痛みを扱っているものばかりだった。

多分、作者の方は、仲間がいて。友情を知っていた。けれども、私は縋るしかなかった。彼らもまた、どこか強い孤独を抱えているのだと。きっと、この人も疎外されて生きてきたんじゃないか、そんな風に思って、私は私を慰め続けた。

深海のような世界を彷徨い続けている。上を見上げて、日の光が当たらない。何処に私の居場所があるのだろうか。強い居心地の悪さ。そればかりが募っていた。私のような嗜好を持っている人間は雑誌などで知っていた。仲間かもなあ、とも思った。けれども、きっと、同じゴシック系の人間の間でも、私は否定される気がしてならなかった。何故なら、私は他者が怖いから。ずっとずっと、疎外されてきた人間は、きっと同じ人種が相手でも、心の壁を作る。そもそも、私は心の開き方が分からない、言葉を共有するという事。余りにも、難しい。

いつの日か、私は社会へと出ていかなければならない。けれども、私は今、この瞬間の事で精一杯だった。私の容貌の維持。私が私でいる限り、私は魔物であり、不死の怪物だった。夜の世界を箒で飛び回る、魔女だった。

それでも、時間は続いていく。私は、大学生になった時に、東京へと引っ越してきて、一人暮らしを始めた。世界がこんなに広いんだ、という事を実感した。

新宿の街の景色は荒んでいて、真っ黒な世界に、何故か光が差し込んでいるかのような錯覚を覚えた。醜悪な欲望が垂れ流される街。ネオンライトが赤々と。眩いばかりに、空間を形作っている。巨大な資本主義の市場。

歪で醜悪な建築群は、どこかゴシック建築の持つグロテスクさにも似ていた。霧の迷宮を彷徨っているような感覚だった。まるで、怪物の殿堂にも思えた。空高く伸びる尖塔には、悪魔達が存在しているように思えた。

次に、原宿に行った。

原宿はファッション街で、私の好きなデザインの物が幾つも置かれていた。

地元では他人からの目線がキツくて、居心地の悪かったゴスロリ・ファッションも、此処では当たり前のように受け入れられている。ぱあ、っと。明るい光が広がったような気がした。もしかしたら、私の人生で始めてかもしれない。此処は、私のような人種でも受け入れてくれる。居場所を与えてくれる。

もし、私が元々、此処に住んでいたら、ヴィジュアル系バンドでも追っかけるんだらうなあ、と思った。最初、ヴィジュアル系というジャンルをよく知らなくて、ヴィジュアル系の音楽を聴く前までは、J-POPは下品な曲ばかり垂れ流していると思っていた。そもそも、歌詞がまるで共感出来なかった。だから、私はヴィジュアル系が好きだった。けれども、きっと。彼らは私を理解してくれないんだらうなあ、と思うと淋しくなった。

原宿。この街に来て、感じた事は。もしかしたら、私みたいな子がいるかもしれないと思った。ただただ、友達が欲しかった。分かち合える友達が。けれども、私はやっぱり他人に話しかけるのが怖かった。友達が出来ればいいのに、と思った。此処に来て、本当によかったと思う。けれども、強い否定の渦のようなものが湧き上がって、私は人に話しかけられなかった。それでも、此処にいられるだけでも幸福だった。

ゴシック・ロリィタ服は、親には理解が無かった。こんな変なファッションを身に着けて、貴方は変なんじゃないの？ と私の母親は言った。悔しかった。

そんな服着て、恥ずかしくないの？ とストレートに言われた事もあった。私という存在全てが、そっくり否定されたような気分になった。何気ない言葉が心に刺さる。親ならまだいい、街を歩いていると、変な視線に晒される、学校の級友に見られたときなんて、とても死にたくなかった。

大切な洋服だったので、手洗いをしようと思っていたが、勝手に洗濯機に入れられて、繊細な素材の為、ぼろぼろにされた事が何度かあった。色落ち、フリルなどの部品の欠損、それを見て、私は一日中、過呼吸とパニックに陥った。自分自身の肉体の一部が損失してしまったような、指だとか鼻だとか耳だとか、小指だとか。そんな感覚だった。私の身体の一部が切断されてしまったかのよう。服が、ちょっと破けただけで二日は錯乱してしまう。胸が深く裂けていくみたいで、贖罪が欲しくなる。親、あるいはゴスロリ・ファッションを身に付けられない人間には、そのような感覚が分からないみたいだった。

この事を思うと、悔しくて涙が出てくる。確かに、私は働きもせず、お金を貰っている身で、こんな格好をするのは変なのかもしれない。働きたい。けれども、私の人間不信はとても強かった

。働く、という事を行えば、私自身が凌辱されてしまうんじゃないか、そんな強迫観念に襲われた。私の言葉が醜くなる、私の思考が醜くなる。他者が強く、強く、入り込んでくる。モラトリアムで、ニートのだ。気持ち悪い。私が幼稚なのは、分かっている。不思議の国のアリスでいたい。少しずつ、少しずつ、私の肉体は女性として成長していく。胸、骨格、気持ち悪い。気が付けば、男の目線も異様な感じがした。怖かった。

私は処女でいたかった。永遠の。犯されていく感覚なんて怖ろしくて考えたくもない。男性はそれ自体が強い暴力性を持っていて、私を凌辱してくるように思えた。

私は性の対象じゃない。私は性を拒んでいた、だから中性的なメイクを施すヴィジュアル系ミュージシャンの顔を愛でるのが大好きだったのだが、きっと彼らも性欲が強いんだろうなあ、と思うと、空しくなった。

私にとって、ファッションとは信仰なのかもしれない。物神崇拜だ。

私は、このファッションを身に纏う事になって、神を見出すのかもしれない。

しかし、私は粗忽な性格のせいか、余り神様を大切に出来ない事が多かった。手洗いで洗濯している時に、外を見れば雨が降っていて、間違えて服を放置してしまった時なんて、白い生地の部分に、赤やら黒やらのシミが付着していた。これは、全部、私のミスだった。それだけで、猛烈に死にたくなった。

ゴシック・ファッションを身に着けていない時は。酷い空虚感に襲われた。いや、自己嫌悪に襲われ、希死念慮に苛まれる、というか。自分が自分ではない。たかが、ファッションでしかない、と普通の思考回路を有する人間なら思うかもしれない、

鏡を見れば、確かに私が映っている。けれども、服を脱いだ時、私の存在が消滅してしまったような感覚に陥って、小さな離人感のようなものが併発する。現実感が無くなる、病気ののだろうか。分からない。

私が私になる。私が私として存在する為には、やはりこの格好しかなかった。理屈では、外装を着飾る事に意味なんて無いのだと、知っている。ファッションだけが、私を認可してくれた。周りの人間は、私を認可してくれない、そんな想念ばかりに苛まれていた。

私は弱さの中で生きている。私は大人になる事が出来ない。私は小さな殻の中に閉じ籠りながら、殻の出る事をいつも夢見ている。私を理解してくれる人。それを探している。時間が経過するにつれて、肌が老いていく、肉体にファッションが似合わないように、変形していく。もし、仕事なんてして、指が太くなってしまったら、どうしよう。筋肉がついてしまったら、どうしよう。肌が焼けてしまったら？ 私が私でなくなる。それがとてつもなく、悲しく痛かった。何故、私は私でいる事を赦されないのだろうか。世界内の小さな空間でしか、私は生きていない。それは分かっている。けれども、どうしようもないほど、私の実存はゴシックという概念によって満たされていた。

愛読書。澁澤龍彦。ボードレール。ノヴァーリス。ルイス・キャロル。などの作り出す、魔術的世界。そこに真実が眠っているような気がした。同じ本を読んでいる旧友はいなかった。私の嗜好がおかしいのだ、という事は知っている。原宿の街並みは暖かく、私を抱擁してくれる。この空間は、まるで異世界の魔物達の城のようだった。私はまるで、魔術師、魔女、吸血鬼になった

ような気分で、この街を歩いていた。真昼のざらつく太陽に照らされているときも、何処か神秘的な真っ暗な夜の世界を闊歩している気分、つねに感じていた暗い世界とは違う、暖かい陽光のような闇。服屋の店員が、異界の魔物で魔術道具を売る商人、魔術師のように思えた。服は、アクセサリーに至るまで高価だったけれども、それだけの価値を与えてくれた。飲食代を削って、無理して買った。どんなものを食べても満たされないけれども、服は私の心の飢餓を満たしてくれた。私が私として、認可される、という事。私が見ている闇の世界が、優しく私を包んでくれる。

私は、成長出来ないかもしれない。精神が、何処までも。小さな世界の中にいる。今、幸福なのだ。だからこそ、今という瞬間、時間がいつまでも続けばいい。懐中時計なんて壊れてしまえばいい。未来は無いのかもしれない。嫌だ、と胸を刺すような世界の中で、私は一人だ。他者が怖い。同じようなファッションに身を包む者達の輪の中へすら、入っていけない。悲しくて、淋しい。けれども、私は幸福なのだ。今、此の瞬間が。永遠に、続けばいい。私は確かに、生きている。生きている実感が在る。

普通にとっての生きている、と私にとっての生きている、は反転しているのかもしれない。昼の世界は闇。夜の世界は光。私が見ている世界と他者の見ている世界のズレ。私は未来に希望は無い。けれども、今に希望は在る。この容姿は何処までも、生々しいまでに存在している。私の思考は私のものなのだ。独り。淋しさの風は吹き荒れるけれども、私は生きていこうと思う。私は私によって、存在させる。ナルシズムでしかないのかもしれない。けれども、私はナルシズムさえも愛すだろう。生きる事。私は何処までも弱い。けれども、私は決して、この世界に屈したくは無かった。私が私に為る、私が私で在る、という事。私は闇の魔物なのだ。闇の魔物として生を受けた。

だからこそ、きっと。この世界の間人達とは分かち合えない。それでもいい。生きている。私はきっと老いないだろう。それでいい。私は今、幸せなのだと思う。この瞬間が、永遠に続けばいいのだと。ただ……。

【呪いとミメシス】

眼球に『白い蟲』が入ってきて。私を侵食していった。

白い蟲には実体が無い、それは男性器のイメージだ。

もう何年も前の事だ。私は私を書き記す事によって、私は私を現している。

私は髪をハサミで切り落とす。すると、私の存在が消えていくような感覚を覚えた。私は何時間も何時間も鏡を見つめながら。私が消えていかない為に、また。私の髪を切り落とす。手足を切断されるような感覚だ。私は手足を切断される夢を見る。

かつての私は所謂、酷いメンタルヘルスの人間だった。今は昔よりも落ち着いたが、心の病は治ってはいない。一度、見てしまった存在の闇は拭い去れないからだろうか。私はリスト・カッターだった。二十歳を過ぎて、何年か経っている。けれども、リスト・カットを止められない。塞がらないのか。傷跡が、何度も痛み出す。それは、実存の闇だ。真っ暗な暗闇となって、私を飲み干そうと迫る。

私がリスト・カットを始めたのは。男性関係だった。十代も終わり頃だっただろうか。私は性に対して遅熟で。鈍感だった。異性は。ファンタジーだった。漫画や小説の登場人物のイメージで、男性を見ていたのだった。性行為をイメージ出来なかったのだ。

その男は、美形だった。だから、騙されたのだろうか。二十代後半だったと思う。何度も何度も押し倒されながら、私は上に乗られた、下半身が痛み出し、血が流れた。そんなものは私の本意ではなかった。けれども、男は抑えきれなかったのか。何度も何度も、その日のうちに、別れを告げた。

その男は性的なコンプレックスが強くて、私のような何も分からない人間をターゲットにしたんじゃないか、と。後から思った。当たっているかどうかは分からないが。

そいつの顔を、名前を忘れる為に、何度も何度も強迫的に思考を消し去ろうとした。

じゅくじゅくと、私の傷口は痛んでいる。肉が見え、骨が見えても。私は私の傷口を深く、広く刺青のように傷付ける。私は、ヘアアイロンで肉を焼いた。火傷の跡が広がり続ける。痛みを感じない。何度も何度も押し当てる。それでも痛みを感じない。痛みは何処へ行ったのか。感覚は何処へ行ったのか。動脈と静脈だけが波打っていた。とくとくと。

コンビニへ行けば、本屋へ行けば、アダルト雑誌が置かれている。それがとても、耐えられなかった。グロテスクで。私は何度も何度も、裸の見える写真のイメージが頭から離れなくて、家に帰って自傷した。頭に植え付けられたイメージを消す為だ。自分が汚い人間のように思えて、何度も強迫的に身体を洗った。

「痛み」は何度も何度も、私の頭の中で反復される。性が、私を殺しにくる。

私はよく、男装を試みた。髪を短くして、服装は全部、男装で。男に見えるように、懸命に努力を重ねた。女性化の排除、女性である事は呪われた宿命なのだ。男性化する事によって、私は性を離れる事が出来る。

親も、バイト先の仲間も、友人も、私の言っている事を理解してくれないみたいだった。

ある日、手足を切断される夢を見た。指が切り落とされていく。身体が解体されていく。私

には、両手両足が無い。両眼も潰された。喉も切り裂かれた。耳は鼓膜が焼かれていく。そんな夢だ。何も出来ず、何も見えず聞えない。そんな世界の夢を見た。そして、ただ私の女性器を犯し続ける男がいる。私は生理反応のせいで、快楽に委ねる。その瞬間は、幸せだ。けれども男が去った後、私はいい知れない絶望に襲われる。それは地獄絵図だ。私は悶えながら悲鳴を上げようとする。けれども、私には声が無い。

夢から醒めた後、現実感が無かった。感情が現実を封印し、眠らせようとしている。

それから、悪夢が私を襲い始めた。

街を歩くと、白い蟲の幻影が見えた。白い蟲はうねうね、と渦巻いている。それは、私の男性に対するイメージそのものだ。白い蟲が私の身体を這っていく。

けれども、男の人は美しい、と思う時がある。それは男装していて分かった事だが、何となく強くなった気がするのだ。私は私の弱さを隠さなければならなかった。しかし、それは思い込みだ。私は外見上は強くなった気分だが、心の荒廃はますます進んでいった。

私は周囲に当たり散らす、「死にたい」「生きていたくない」「お前らなんて大嫌いだ」。呪詛の反復が積み重なる。憎悪が止められない。それはストレスからだ。そして、ナルコレプシー、過剰睡眠、パニック発作などの生体防衛システムが現れる。拒食症も過食症も交互に現れた。勿論、周囲に迷惑を掛ける事になる。日に日に、周囲は疲れ果てていくみたいだった。けれども、私は私自身に疲れ果てていく。

誰も私の「痛み」に気付いて貰えない。それ処が、何度も何度も、反復して私の傷を深めていく。お前は傷付いてなどいないお前は傷付いてなどいないお前は傷付いてなどいないお前は傷付いてなどいない。そのように他人が云っているように聞こえる、一日中だ。

化膿する肉に集る蛆のように、他者の何気ない「気にしなければいいよ」「思い込み過ぎだよ」などの、言葉が腐乱となって私の心の傷口に、卵を産み付けていく。観念が肥大化していく、妄想が私を侵食してくる。まるで世界が、世界が一個の男性器のように見え、私は日々、強姦されるかのようなイメージに襲われる。私は私自身の性欲にも貪り喰われていくようなイメージに襲われる。生理の日は、酷い。真っ赤な色が溢れていく。

私は私を消し去りたくなる。消滅を望むのだ、いっそ消えれば楽になるだろう、と。精神的消耗は、次第に肉体の消耗にも繋がっていく。私は、他人と会う事を次第に拒み続けた。妄想が、普段の生活に影響していく。想念が、私から集中力を奪う。私は当時、通っていた。大学にも行けない程、消耗した。やがて、バイトも辞めた。とても、他者と関わっている余裕など無い。

そんなとき、たとえばTVで餓死者達の映像が流れる。私は彼らに対し、痛みを感じなかった。それ処か、皆、死ねばいい。無駄な人間が死ぬ。何故ならば、私は彼らの痛みを何も感じない。殺意ばかりが膨れ上がった、私自身もまた、闇に吞まれていく。サディズムの連鎖。悪意の連鎖。世界に蔓延する憎悪のイメージの連鎖だ。

酷いとは感じたのだが、現実感が異様に希薄だった。完全に、スクリーンの外側、自身の外側の人間は、実体を感じ取れなかった。それよりも、自身の悪夢的な反復し、模範していくイメージの方が私には一層、深刻だった。

私は、猟奇殺人犯の本を大量に読んだ。おそらく、彼らも痛んでいたのではないだろうか、と

考えた。誰にも理解されず、誰にも自分の事を分かって貰えない。圧倒的に酷く、孤立し、痛んでいる者は、小さな世界へと閉ざされて。他者がいなくなり。他者の痛みなど感じないのではないか。特殊な殺人犯は大抵、過去に酷い虐待や性的凌辱を受けている。

あるいは、特殊な嗜好を持ち、それを解消出来る場が無い。そのような人間でも殺人を犯さない人間も多い、という人がいる。それは幸運からではないか？ 犯さなかった人間は、たまたま、凶器が手に入らず踏みとどまったかもしれない。標的となる人間を殺す機会に恵まれなかっただけかもしれない。

彼らは私の声と言葉そのもののよう思えた。

けれども強姦魔は、やはり大嫌いだった。強姦殺人者に対する、理想化と侮蔑、アンヴィバレントの感覚、気付けば、汚い部分が見えないように、見えないようになっていき、猟奇犯罪者がヒーローのように、神格化されていった。その後、強姦行為を行っていない無差別殺人者などを、神格化していった。

私もいつか、人殺しになるかもしれない。怖さと同時にまるでファンタジーのように思えた。それだけが、壊れていく心を少しだけ、安定させた。痛みは見えない。外傷的痛みは見えるが、内傷的痛みは見えないのだ。

物質的飢餓は見える。けれども、魂の飢餓は見えない。人間は言葉が無くても死ぬ、貧しい国には大抵、宗教がある。信仰は、きっと物質以上の魂の飢えを救済する。

自傷は内部の痛みを外傷によって、顕現させる行為だ。

心の痛みをどうやって伝えようか。私は書き言葉による表現方法も歌や絵画といった、表現方法も出来なかった。その頃の私は文章を書けなかったのだ。単刀直入に身体を傷付ける事しか、心の荒廃を現す事が出来ない。何度も自己嫌悪に陥って、甘えるな甘えるな甘えるな甘えるな、と自分に言い聞かせて、また他人にもよく言われた。その度に、一度、必死で立ち直ろうとするが、悪夢のイメージが頭の中で反復され、再生され、また私は自傷を始め、過剰睡眠を行った。自我をコントロール出来ない。自己啓発書を何冊も何冊も読んだ、けれども私を立ち直らせてはくれない。やはり、私の自我を安定させてくれるのは。この世界を破壊してしまった、犯罪者ばかりだった。そう、痛み、に埋められると。世界が観念化、記号化していく。ファンタジーと化す。私が感じている痛み以外の痛みは分からなくなる。世界には私しかいなくなる。

他者に対する憎悪も深まっていく。攻撃性がストレスの為か、増していく。

他人は私を無意識に傷付ける、私は他人に対する攻撃性が日々、強くなっていく。

他人は私を傷付ける存在だ。殺したい。殺してやりたい、世界中の人間に対する憎しみが増していく。私を受け入れない世界など壊れてしまえばいい。これは防衛本能だ。私は傷付けられるから、傷付けるしかなくなる。思考が奪われ続けていく。世界は私を殺しにくる、世界は私を殺しにくる、世界は私を殺しにくる、だから私は殺さなければならない。無差別にでも。親でも友人でも。殺しにくるからだ。

それをどのように世界に現そう。そればかり考え続けた。

私の心の傷口は化膿し、広がり続けていく。心は悲鳴を上げている、泣き叫ぶ心が痛みとなって、私の思考回路を蝕んでいく。思考を遮断する為に、親に内緒で通っていた心療内科で貰った向

精神薬を、大量服薬した。思考が停止する瞬間、私は少しだけ自由の感覚に酔い痴れる。天空と。暖かい、身体を抱擁する太陽が垣間見えるかのようだった。

分かったのは、世界は拷問器具だ。と。

サディズムは連鎖していくのだ。一個の悪意が蔓延していき、私もまた、闇に染まっていくかのような実感があった。他者を傷付けてやりたい。そのような感覚。悪意を撒き散らしてやりたい、というような、憑依的な妄想。

まるで見えないナイフが生えている。それが私を深々と刺していく。逃げなければ、逃げなければ。何度も何度も見えないナイフは私を刺していく。鉄の処女、という拷問道具がある、女性の姿に模られて、鉄製の内部には無数の針が生えている道具だ。構造は巧みに急所を外してある。犠牲者はショック死しなければ、失血死するまで、全身を串刺しにされて、内部で生き続ける事になる。私は暴力的な何かに犯されながら、その器具の中で何時間も、何日も何ヶ月も掛けて。針で身体を少しずつ。少しずつ、突き刺されていくような気持ちだった。

ある日、私は飛び降り自殺を試みる。

コンクリートに私は張り付いた。痛みを感じない。感覚が無いのである。顔の顎骨は砕かれて、肘は骨が突き出て、靭帯は切れていた。それでも、私は余り痛みを感じなかった。

病院のベッドで、私の両親は悲しんだ。それだけがただ痛かった。両親の涙が痛かったのだ。身体を傷付けるよりも何よりも、それのみが痛かった。

愛を感じたのは、この時だった。私は愛されているのだ、と実感した。

それが胸を刺し、痛ましく。私は生きなければ、と泣き叫んだ。確かに、今でも死にたい、消えたい。けれども、愛を感じた瞬間を思い出せば、生きなければ、と今でも思う。

それがあって、どうやら私はまだ生き続ける事をしている、性的な物に対する嫌悪感はまだ無くなりそうにもない。

そして、私は小説を書き始めた、リスト・カットが少しずつ止み始めた。

私は今、書く事によって、壊れた心を構築して、心の傷口を縫合する作業に入っている。そうやって、世界の外へと出たいのだと。

私は私が正常なのだ、と信じている。

それは疑いの無い、確信だった。

都市迷彩の下、私は此の世界に対して、実存の出口を求めている。どうやって、此の世界から逃れようか。何処へ行けばいいのか。私はまだ分からない。掴み取れない、現実ばかりが続いている。鎖を引き千切りたい、何故、此れ程まで此の世界は狭まっていくのだろうか。たえず、醜い声音ばかりが反復している。思考する事も思索する事も出来ないイメージが続いている。奪われ続けているのだ、現実が。

乖離していくのは、今日も同じだ。

いつからだろうか、私は日光を嫌い、夜にのみ生活するようになったのは。

最近、バイトの無い日は、何時間もアンダー・グラウンド系の動画を干渉していた。

深夜、暗い部屋で。AVを鑑賞し続ける。それは呪いの儀式だ。二人のレスビアンが裸体を晒しながら、舌と舌を絡ませて唾液を交換する。ねちよりねちりと。彼女達の意識が私の中に入っていくかのようなようだった。濡れた裸体が発行している。ゴキブリみたいだ。BGMはアップテンポのトランス・ミュージックだ、彼女達の脳内ではおそらく南国の島国でメロン・ソーダやココナッツ・ジュースを食しているかのような気分になっているのだろう。他者の性行為の鑑賞は何処か非現実的な様相を示している、それはニヒリズムだ。スポットライトが彼女達を照らしている、それぞれの衣装はオフィスや学校、専門職などのそれだ。何処か原始的な舞踊にすら似ている。彼女達はシャーマンなのだろうか。

私は画面の前で、ポップコーンとコーラを交互に口にしながらそれを見ている。私の全身も紅潮していく。私は画面の中の女に同化していく。それは呪われた模範だ。

コーラの中に、いつも安定剤を入れて呑む。そうすると、何だか爽快な気分になれる。そして、私は大量に冷蔵庫にコーラのペットボトルを入れている。

私は酷い空虚感に襲われながら、そうやって毎日を浪費していた。

部屋には余り物を置かない、何かブランド物の品を買っても、すぐにゴミ捨て場に捨てたり、古着屋に売ったり、ネット・オークションで捌いてしまう。

私はいつの日からか、精神病を患っている。メンヘラーだとかココロ系だとか云う人種に属している。ある昼下がりに歩いていると、待ち行く人間達が裸体を晒しているように思えた。ストリップ劇場だ。それは幻覚だと知ったのは、家に帰って数時間後の事だった。男を見ると、巨大化した男性器を抱えながら歩いているように見えた。空を見ると、糞尿のシャワーが降ってくるように思えた。それを切実に感じ、私は昼下がりに街を歩けなくなった。ぐちゅりぐちゅりぐちゅりぐくん、待ち行く人々が糞尿を飲み干しながら、微笑んでいるイメージが頭に浮かび上がってくる。トイレに私は必死で嘔吐した。私の現実は壊れてしまった。

統合失調だと医者には診断された。私は病名なんてどうでもよかった。

私は夜。数時間だけ軽いスナックの仕事をした後、ひたすら友達と遊びもせず家に引き籠もっている。その後、ホモセクシャルやレスビアン、シーメール。人体改造、サディズム、マゾヒ

ズム、フェティッシュ、拷問などの動画を覗いている。それも何時間も何時間も何時間も何時間も。一通り動画を見た後、私はトイレで嘔吐する。たまにバスタブでも。バスタブに来ると、内臓が床を這いずり回っているように見えるときがある。

そんな私だが、水商売では普通に接する事が出来た。その代わり、意識は完全に乖離して、別の私へと置き換わっていくけれども。家に帰って、また吐く。

完全に摂食障害も患っていた。

此の酷い嘔吐感は何処から来るのか分からない。とにかく、酷い幻覚に蝕まれていくのだ。当たり前のような幻覚。それは実体を持って、私に迫ってくる。ある日、冷蔵庫を開けると、内臓が詰め込まれていた。勿論、それはよく見ると、二日前に買ったフライドチキンの盛り合わせだったのだが。明らかに、それは暴力性を持った非現実的な物へと変わっていく。夜寝れば、斃されて。人体改造されていく私がいる。壁に磔にされて、肉体を、覆面を被った男達に犯されていく。何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も。

寝汗でびしょりとなりながら、気が付くと経血が流れている。

私は欲情しているのだろうか？ 欲求不満なのだろうか？ けれども、私は誰とも今、肉体関係を持ちたいとは思わない。マスターベーションもしたりしない。

とにかく、酷い実体感を持って、それらは私に迫り来るのだった。その理由が知りたくて、私はアングラなAVをひたすら見ている。理由が分かるからかもしれないからだ。そして、それを見る度に、その映像が強いイメージを伴って更に世界に侵食してくる。悪循環だった。しかし、何か私の世界を浸食している。それを確かめなければならない。

AVに映る女達は、確実に私と同じ種類の人間が混ざっていた。よく見ると、手首に自傷の後があったりする。巧みにファンデーションで隠しているが、私には分かる。彼女達の両眼には、底知れない暗闇があった。

私は顔面に孔を開けて、唇や舌や鼻やコメカミにピアスを入れる事にした。それまで、ピアスは耳だけだったのだけれども。精神病を患ってから、何となく身体を痛めつけない衝動に襲われてきたのだ。それで、仕事と家に居るとき以外は、顔中にピアスを装着するようにしている。だんだん、傷口が瘡蓋になっていって、ファンデーションを塗れなくなっていくのだが、何故だか不快さを感じなかった。

ぎゅりいい、と孔を開けた皮膚からは、強い実体間を伴って、私が私で在る事の説得をしようと試みるのだ。ぷつぷつ、と貫通した瞬間に、思考と思考が接続される。

それは不思議な感覚だった。ピアスが実体となって、私を私へと変えてくれる。

接続された、意識と意識が結合する瞬間、それがピアスだった。

そういえば、私は自分自身がどういう人間だったかを思い出す。

私はずっと心を閉ざしていた。

観念の世界に入り込んでいた。本ばかりが友達だった。私は気付くと、いつも図書館にいた。様々な作家の本を読んでは、一人で夢物語の世界に浸っていた。

二十代に近付いて、そんな自分に嫌気が差した。このままでは、何処へ行っても、私は他者とのコミュニケーションを図れない。たとえば、私はTVのバラエティ番組や流行のファッション

などに付いていく事が苦手だったりした。それだけで、私は強いコンプレックスに苛まれた。

人を求めて、水商売に走ったのだった。けれども、倦怠だけが続いていた。仲良くなった人達と話しても、強い倦怠感に襲われてしまった。友人達と話せば話す程、私は立っているだけで困難になった。

そして、私は驚く程、他者とのコミュニケーション能力が意外に高い事に気付かされた。私はずっと、夜の世界で働く人間と自分は別人種なんだ、と思っていた。けれども、実際には、水商売に生きている人達は、何処か私と同じ匂いを抱えている人間達が多いような気がした。世界と相容れずに、乖離していく何か、というか。

酷い眩暈に襲われて、客の顔に嘔吐物をぶち撒けてしまった日に、私はもう、駄目なのだ、と気付いた。

その客は、私に軽蔑の目線を投げかけていた。先輩の一人が、フォローをいれて、タオルで彼の顔を拭きながら、宥めていた。

私は怒られなかったし、仕事も止めさせられなかったが、その事件が私の記憶に、傷として深く焼き付いた。

そんな事があってから、私は自分自身が完全に、おかしい事に気付いた。いや、兆候はあったのだけれども、何処か私は自分自身の意思で何とかなる、と思っていた。

私はある日、AV女優と知り合った。たまたま、友人の友達だったのだ。

彼女は父親に性的虐待を受けて育った。

小学校の頃、身体を触られた。中学校の頃、寝ているときに下着の中に手を入れられた。

彼女の父親は、母親と離婚寸前だったという。彼女は母親にその被害経験を伝えていない、そうすれば家庭が無くなる最後の一線へと変わる事が確実だったから。

彼女はそれを真摯に、情景が浮かび上がるように私に話してくれた。

彼女の話した体験が、まるで私自身の記憶のように伝染していく。

私は感受性が異常に強いのだろうか。まるで彼女の記憶が私の記憶であるかのように、その映像がフラッシュバックしていった。

大量の男性器が私の女性器の中を行き来した。ずぼずぼ、と膨れ上がるそれは。全身に掛けられた汚物のシャワーに塗れながら。私の感情は暗い闇へ闇へと落ちていく。

私は糞尿を喰わされながら、ビデオカメラに晒される。私は自分の汚物を垂れ流しながら、それを男が舐め始めた。彼のそそり立ったそれは、彼自身はまるで万能の神のように思っているようだった。男の顔は強い笑みに変わっている。

体験した映像では無かった。けれども、私はそれをまるで体験した事があるかのように、夢に現れ、白昼夢の幻覚として現れる。

心的外傷なのだろうか。酷いフラッシュバックに襲われる。深い闇ばかりが見えた。

この両眼に焼き付けた壁画は何度も私の心へと反復していく。腐りきった根が世界に巡っている。私自身が体験した事があるかのように、私自身が凌辱される映像に浸食されていくのだ。私は自分自身の自我が崩壊していつている事に気付いた。

冷蔵庫の中は、相変わらずグロテスクな肉界が蠢いていた。シャワールームは、相変わらず蛇

口からずぼずぼずぼずぼごっぽりごっぽりごっぽり、と眼球やら指やら髪の毛やらが流れていく。そして、バスタブには大量の人体が詰まっていた。それをホラーだとは感じなかった、当たり前のように私は受け入れている。幽霊的な何かとは違う。

換気扇の音が、気になった。ぶおおおおお、ぶおおおおお、と鳴り響いていく。遠くから聞こえている筈なのだが、耳元で囁くように聞こえ出す。それはまるで人の声だ。いや、人の声なのだろう。

そして、私は本当に酷い体験をする。

私は車の運転中に、仔犬を轢いてしまった。

それは現実なのか、夢なのかが分からない。確かに道路には血液が大量に撒き散らされていた。ベリベリベリベリい、と強烈な音を立てて車は何かを引きずっていた。

仔犬の眼は、恨めしそうに私を見ていた。

その光景がどうしても忘れられない。焼き付いている。また、私の精神に、大きな傷が増えたのだった。私はオーバー・ドーズを行って、その記憶を忘れようとする。それはきっと、夢なのだろう。夢なのだろう。夢なのだろう。……そう、夢なのだ。私は白い錠剤をがっぼがっぼ、口に入れながら。パソコンのスクリーンに魅入られる。現実と非現実が交差していく。私は延々と、自分のブログに。車で仔犬を轢いてしまった事を書き続ける。それは病気の症状であるのだ、と。自身に言い聞かせる。実際、そうであるかもしれないのだ。しかし、そうでなかったとしたら？ 私は。私は、本当に最悪な人間だ、という事になってしまう。何処を見ても、動物虐待を執拗に糾弾するサイトばかりが溢れている。シャワー・ルームには、相変わらず、爪とか髪の毛とか汚物が這い回っていた。

私は記憶回路が、日々、おかしくなっていく。一体、私が何だったのかさえ。気付けば、私はむしゃむしゃ、と。花瓶に飾っていたガーベラを口に入れていた。隣の花壇にある。名前もよく分からない、チューリップみたいな花を口に入れていた。何でこんな事をしているのか、自分でもよく分からない。ただ、お腹が空いた、とかじゃなくて。何となく、これが自然な行為だと思ったのだ。意味なんて無い。意味なんて無いのだけれども、気付けば、花壇にいるミミズを漁っている。そして、これは食べられるのだろうか、と考えている。ヘッドフォンから聴こえる声が、花壇には私の大切な記憶が埋まっている、という。ヘッドフォンからは音楽が聞こえる。あれ。私はヘッドフォンなんて所有していたっけ？ とにかく、聴こえるのだ。私は毎日、何時間も隣の花壇を覗き込んで、草木を撫でている。彼らは私に優しいのだ。彼らこそ、とても人間らしかった。

壁に掛かったキティちゃんの時計がぐるぐるぐるぐる、廻っている。時間が分からない。三半規管がおかしい。耳元で何かが囁いている。「家中の電気機器からお前の体内に侵入する寄生虫の卵が産み付けられている」という声が聴こえた。私は焦りながら、ラジオやテレビを買ってきたバットで破壊する。電子レンジも。どうやら、パソコンは無事なのだ、と声は言った。パソコンは毎日、10時間以上は触った。毎日、毎日、ブログの更新だ。内容なんて無かった、ただただ私が見えている世界を書き綴っていった。仕事は？ 携帯は破壊してしまった。電話線も包丁で切った。私は、一個の城を作ったのだ。

城？ いや、むしろ絵画だった。私は一枚の絵画、そして画廊を家の中に作ったのだ。あるいは、それはシュルレアリズム絵画だったのかもしれない。

相変わらず、冷蔵庫の中には肉片が蠢いている。

破壊されたモノは、家のあちらこちらに散乱している。

私の心の様相は、それらのキャンバスに映し出されているのだ。

私は、病院で。統合失調症だ、と告げられた。薬を二週間に一遍、貰っている。

.....病名に何の意味があるのだろうか.....？

私の眼で見えているモノは、画廊であり、絵画なのだと思っている。

そこに意味されるモノは、とてつもなく、在る意味で。

神々しかった。

そこにこそ、本当の意味の現実が収まっていたのだ。

私は今日も心療内科で薬を貰いながら、貰った薬を全て、トイレに流す。

私は、私が見た世界を真実の在りのままの姿だ、と思っている。

そこに、私は安住しようと思う。

誰に言われようとも。

私が間違っているとは、思えないのだから。

深く。そして、磯の香りに満ちた空間。

本棚はぐっしょり、と水を吸って、並んでいる本達は変色し、ぼろぼろになっている。

人間の知識が、深海へと沈んでいく。

声。言葉。意思。そういったものが、暗い海底へと沈んでいく。

海に近い家だった。

先日、起こった土砂崩れによって、この家は埋められてしまった。

僕は、この部屋と命運を共にするのだ。

僕は本を読み続けた。部屋は更に、少しずつ浸水していく。

冷え切った体内に漬かっているような錯覚。事実、此処は一つの人体だった。

僕はこのまま、生き埋めにされていく。それでも構わない。

僕は静かに、本と共に心中するのだろう。

知識は、閉ざされた部屋なのだ。

意識とは海なんじゃないのだろうか。

僕の世界はこの部屋の中だけだったし。僕はこの世界から出ずに、世界を眺めてきた。僕はいわば、水槽の中の魚だった。

此処は僕の墓だ。冷たい棺桶。そして、何処までも優しい母の胎内のような。

そう、僕は今、現実に殺されるのだろう。

僕は、現実をいつも歪めてきた。

僕が生きている事象。それを本によって、塗り替えてきた。詰まる所、僕はイマジネーションの中の住民であり、イマジネーションの中でしか生きていないのだ。

それが、今、崩れていく。

もう、足元まで水に浸かっている。僕は此処から脱出しようという意志は無い。そして、実際、脱出は絶望的だろう。

そうやって、僕の世界は完結するのだ。

鳥籠がガタガタ、と鳴る。悲鳴が口々に聞こえる。

大量の梟達が、ばたばた、と羽をばたつかせていた。僕が鳥籠の中で飼っている鳥だ。

知恵の象徴である梟。僕のお気に入りだった。

僕と一緒に、彼らも埋葬される。彼らには気の毒だが、僕にはどうする事も出来なかった。あるいは僕の一部だったものが、僕と一緒に沈んでいく事。これがどうしようもなく、僕という存在を肯定しているかのようだった。

そして、部屋の中央にある硝子ケース。

その中には、一個の心臓が時計と繋がれて息衝いていた。

それは、僕の命のもう半分だと言ってもよかった。

僕には恋人がいた。

彼女は交通事故で、脳死した。

彼女の心臓を、彼女の体内から抜き出して、透明なケースに入れられていた。ある時、僕が彼女の胸を割り貫いて、心臓を取り出したのだった。心臓は加工されて、時計と繋ぎ合わせた。心臓が脈打つたびに、時計の秒針が動き出す。

そう、此処は僕と本と彼女の墓になる。

海水は次々と増え続ける。時間は進み続ける。

気付くと、魚が混ざっていた。小さな魚だ。どこか神々しい煌きすら放っていた。

それは、何か悪魔が形を変えてやってきたのだろうと思った、僕を冥府へと連れ去る為の案内人として此処にいるのだろう。僕はきっと、溺れ死んだ後に、魚達に肉体を食われていく。すると、僕はまた海の中で生きていくのだろうか。

ぷかり、ぷかり、と。数冊の本が水の上に浮いている。

ぐっしょりと濡れたその中の一冊は、僕が書いた本だった。

自費出版で出して、結局、売れなかったのだけれども、生きていた頃、彼女は大層、僕の本を気に入ってくれた。

僕は、夢が閉ざされて彼女が死んでしまった瞬間から、外の世界に出るのを止めた。

僕は、それ以来、本当の意味で生きていたし、そして、今、この瞬間を幸福だと思えるのだろう。

只、優しく全て水に流されて……。僕は眠りに付くのだと。

死は非情なまでに、僕を断罪するのだ。

僕はこれから言葉が奪われて、意志が奪われる。死の闇は、僕の思考を。僕だったものを全て剥ぎ取ろうとするのだ。